御神体を本殿へお遷しする本殿遷座祭

屋根地工事（昭和 46 年）

竣工奉祝祭で神楽を見学する参拝者

千木取付工事（昭和 46 年）

鶴崎神社・八幡神社両社本殿屋根銅板葺き替え記念（昭和 46 年 5 月 15 日）

鹿島神社を仮殿として執行された本殿遷座祭

銅板の葺き替えが完了した鶴崎神社本殿(昭和 46 年)

仮殿から御神体を遷す神職・奉仕員

銅板の葺き替えが完了した八幡神社本殿（昭和 46 年）

千　木（ちぎ）

本殿の屋根等で交差する２本の木を屋根上に置いたもので、もとは破風が延びて交わった構造的なものであったが、後に棟上に跨がらせ神社の象徴として用いられるようになった。千木の上端を垂直に切る「外削ぎ」と、水平に切る「内削ぎ」がある。伊勢神宮では、内宮が水平、外宮が垂直であることから、女神を水平、男神を垂直とする説もある。

堅魚木（かつおぎ）

「勝男木」、「葛緒木」とも書く。棟上に並べられた横木で、本来は棟を押さえるための部材であったが、千木と共に神社の象徴として用いられるようになった。

伊勢神宮の内宮が 10 本、外宮が９本で、他の神社では規模に応じて２本から５本程度が多い。

中世においては、千木や堅男木を持たない本殿の方が多く、江戸時代後期になって取り付けられた例も少なくない。

栃　葺　き

栃葺き（栩葺き）は板葺の一種で、柿葺きに代表される杉や椹の薄い板（手割板）を、１寸（3cm）ずつずらしながら重ねていき、竹釘で打ちとめて敷き詰める方法、およびその屋根のことを指す。

「こけら葺き」よりも厚い板で葺いた屋根を、「木賊葺」、木賊葺より厚いものを「とち葺き」と呼び分けている。

木質を直接用いた屋根葺は世界各地で見られるが、その多くは厚板を並べ、石を置くなどの無骨な形のもので、日本の「こけら葺き」のように華麗なまでに発達した地域は他にはない。

「こけら葺」に使用する柿板は、油分や粘着力があり、木目の通った耐水性のあるサワラや杉、栗の大径木を輪切りにした赤身材から柾目の薄板を小割にしたものである。その制作にも、かつては三州流や遠州流、出雲流など、四流十一派と称された地域性を色濃く残していた。

こけら葺きの「こけら」は「薄い木片」という意味で、板の厚さは約３ミリとされており、金閣寺や桂離宮などがこけら葺きで葺かれている。